世界の外から

ハンバーグ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
世界の外から

【Ｎコード】
Ｎ５６５６Ｋ

【作者名】
ハンバーグ

【あらすじ】
おい主人公もっとがんばれ！
主人公赤峰くん１８歳が頑張り？ます。
異世界ｔｒｉｐなんてよくある話？
爺さんちょっと自重しろ！
剣も魔法もございます。
でも主人公がどれも使えない。
え？面白いの？
すみません。調子のりました。

頑張ります。

0話　プロローグ？

プロローグ？

まず何から導入しようか。
あぁ、私の日記になってしまいそうだ。
読み飛ばしていただいても何も支障はないと思う。

私は暇だから。

これは私が見た物語である。
残念ながら私が諸君にこれを伝達する手段が言語しかないのがいささか惜しまれる。
記憶を諸君に送信でもしようか？
それは記憶の奔流である。
だから一気に押し寄せる物語の波は圧巻だ。
だがそこにあるどんなハードを用いてもダウンロードができないのでやめよう。

脱線するが私はこの時代この惑星の機器は割と好きだ。
いちいち打ち込むこともどこか楽しいと思っている。
永遠とは余計な手間をかけたくなるほど暇なのだ。

話を戻そう。
私は暇なのだ。
だから私の意志に従わない存在を諸君が映画を見るように、
私はそんな存在を観てみようと思った。
これが中々面白い。

まずそのために私は一つの世界を用意した。

これでは今までと何も変わらない。
そう。
諸君の世界と何も変わらない。
水の色は何もしなければ透明のままだ。

ここに1滴黒のインクでも入れよう。

黒のインクを彼を探し当てる旅も書き綴りたい。
私は万能だが、暇だから旅をしてわざわざ探したのだ。
が、諸君の常識を私の常識まで変化させるだけ諸君がこの文章を読んでくれている自信がないので割愛したい。
私の時間は割とあるのだけどね。

例えるならば、やはり自分が観た映画を人に勧めたい気持ちのほうが強いのだ。
何より強いのかって？
まぁいいじゃないか。

では私が見つけた主人公の物語をお話したい。
彼には唐突で若干申し訳ないことをした…

0話　プロローグ？（後書き）

何も進んでません

1話　プロローグ

知識とはなんだろうか？
生まれる前から持っている（ように思われる）知識を一般にアプリオリな知識（先天的知識）という。
生後我々が得る知識をアポステリオリな知識（後天的知識）と言う。
これは問いの答えにはなっていない。

彼はいつからだったであろうか、
その2種の知識の区別がつかないと自覚するようになったのは。
他人にそれとなく聞いたことがある。
日本語をいつ習得したか？と。
どうやらそこは日本のようだ。
もちろん冗談のように何気ない様子で尋ねたので彼の友人はこういった。
俺は天才だから最初から知っていたんだ。

そこで彼は思った。
ではどの言語を見ても次の瞬間にはあたかもアプリオリな知識であるかのように、
それら全ての言語を理解できた自分は神様なのだろうか？と。

彼の名前は赤峰（あかみね）　弥生（やよい）
女性ではないか？
と思われるかもしれないが男性である。
だが髪型が短髪でなければ女性と間違えられるかもしれない容姿ではある。
学業は優秀。

奨学金で大学の学費が賄えるほどであるし、
スポーツもよくできた。
今年大学1年生となり4月一杯は名前でいじられた。
しかし、その名前のおかげもあり気軽な友人もたくさんできた。

だが、それから数カ月後。
彼はサークル活動が終わり皆と別れてから以降
忽然と姿を消した。

そう。
確かに彼はいなくなった。
しかし、誰も彼の存在に関して認知できたものはいなかった。

まるでそもそも存在していなかったかのように世界はいつもと同じ
ように回っていた。

2話　うっとおしい奴が出てくるぞ…

どうも。こんにちは。
赤峰　弥生です。
日常とはなんでしょう？
いつもと変わらないルーティンな日々のことでしょうか。
そんな日々の中に時々非日常があれば世は事もなし。
そうです。
非日常が非日常足るのはそれが「時々」の出来事であるからです。

今僕がいる場所はどこでしょうか？
少なくともｇｏｏｇｌｅ　ｍａｐで検索しても出てこないのではないでしょうか。
床、壁、天井。
そのどれもが白・白・白。
あまりに白すぎてどこまでが壁でどこまでが天井なのか錯覚を覚えます。
確かに僕は「見て」いるのですが「分かりません」
こんなことは初めてです。

目の前に一人のお爺さんが座っておられます。
空気椅子でしょうか？
姿勢は確かに座っておられます。
ですが白い椅子なのか全く椅子が見えません。

不思議です。
自分以上に不思議な存在を見るのは初めてです。

どうやらここは僕の知る範囲の世界ではないらしい。

この自問は終わりそうもないので話しかけることにした。

「ここはどこで、あなたは誰ですか？
どうして僕はここにいるのですか？
僕は死んだのですか？」

お爺さんは答えた
「全てに答えることは出来るがそれに意味はない」

思った以上にハキハキした口調で、また声は若かった。
目を閉じていればとてもお爺さんである姿は想像できない。

「君はヒトにしては不思議な力をもっているだろう。
そのことに関して、また私の都合で君はここにいる。」

僕は誘拐でもされたのだろうか？
この能力を知るのは僕のお爺さんくらいのもので
その祖父は必ず僕の味方だろうし、
しかもそれではこの部屋の異様さは全く説明できない。

「不思議ついでにもう一つ不思議を君にプレゼントしようと思ってね。
私の知り合い、ではないが爺さんが強い人をもとめていてね、
君を紹介しようと思っている。
実際君は大学生にしてはやや強いかもしれないが
あっちじゃ弱い部類にちがいない。」

この人はダメだ。
何も人の話を聞いていないし聞く気がない。
自分から「見て」やろうか？

とも思ったが疲れるし苦しいのでやめよう。

「主人公がチートだったら世の中万々歳で何事も終わってしまうじゃないか。

若者は苦悩してこそ青春の思い出に色が出るというものだ。

あ？今力を使おうとしたね？

「なぜ分かっ…」

ダメダメダメ。今はまだ早い。

もっと学ばなければ。知識なき者が力を振りかざせば自身をも飲み込んでしまう。

これはゲームの世界じゃ常套句。

そして私が言わなければならいないセリフだ。」

何を言っても無駄なようだ。

僕自身テレビゲームは嫌いではないのでこんな場面に出くわすことはしばしばあった。

「分かりました。分かりました。

では僕は何をすれば？

どうすればクリアなのですか？

あなたか神とでも名乗るのでしょう？」

白いお爺さんはニコニコしながら続ける。

そのニコニコには微塵もいやらしい部分はない。

「すばらしい！なんと者分かりのいい主人公だろう。

てっきり無理やり送ることになると思っていた。

すばらしいがその質問はダメだ。

何をする？クリア？

そんなものはあってはならない。

いや。人生の目標は持てばよい。

人生が終わるのは死ぬときだけ。

そこに筋道などない。
問題はどう生きたか。
君が死んでも世界は続く。
その後のことは私だけ知っててていれば良い。
だから君は生きなさい。」

急に彼が聖人のように見えてきたのは気のせいだろうか？
いや。
自称神であるが、およそそれは正しいと思えるのでその疑問は失礼だろうか。
「そうですか。では僕は元の世界には？」

「もちろん戻さない。
問題もない。あの世界はどの歯車も狂ってはいない。
問題があるとすれば君自信。
納得できるできないに関わらず送られるということ。
時間がない。もういいだろうか？」

＜戻さない＞ときた。
戻せるということではある。
がそこは神の御業だろうか。
元の世界は正しいという。
未練はないと言えばウソになる。
が、僕を悲しむ存在が居ないと言うだけで心は軽くなってしまった。
抗うことすら無意味な状況とはこのことか。

「分かりました」

そういって弥生はその場から消え去った。

「しかし彼の力は面白い。
使い方次第とはあのことか。
歳の割に精神も大人びていたのはやはりそのせいか？
だが、もつだろうか？
やはりヒトの範疇を越えはしていないし…
個人的には完結してほしいが…」

「あ、私の芝居も語ってくださいよ！」
ブツブツ独り言をしゃべった後に上に向かってそう叫ぶとその男もまた消え去った。

3話　選手入場

年老いた男が廊下を歩く。
幅は１０人が並べるであろう。
その廊下、装飾が質素とはいえ壁は大理石だろうか、
高級であろう石が使用されていた。
一般庶民の家ではあるまい。
また窓と言うには大きくガラスが入っているわけでもないのだが、
やはり窓と呼ばざるを得ない窓が並んでいた。
そこから見える景色は空を手で掴めるばかりに青々とした空が広がっており
高さは約５０ｍ。
見下ろせば賑わう街が見渡せる。
遠くを見ればそびえ立つ山々がある。
ここからいくらほど離れているかが分からなくなるであろう山が連なっていた。
間違いなく人が越えられる高さではない。

彼は扉の前に立ち止った。
「おはよう」
扉の両脇にいる兵たちに挨拶をする。

「おはようございます。
　どうかご健闘を。」
彼らはそう返し扉を開く。
この場面だけ見れば、彼は今から誰かと戦うのか？
と思っても仕方がない。

が、そうではない。

部屋は大きくはなく、
また暗い。
部屋の四隅に火が灯されているだけであった。
しかしそれよりもその火はどうだろう。
浮いている。
そして燃えている。
彼が気にしないのでやはりそれは普通なのだろうか。

その中央にゲームを嗜む者なら何度も見るであろう
所謂(いわゆる)魔法陣らしきものが描かれている。

面白いことに基本は円形だと思ったが
ここでは四角の魔法陣であった。
この世界はゲームのセオリーが通じないのかもしれない。

彼は陣の傍で目を閉じる。

するとチョークか血か何かで書かれていた陣が宙に形を持って立方体となった。
その表面には様々な文字が走る。
いや。
どちらかと言うと「這う（はう）」が正しいか。
蛇のように動く。
そしてそれは加速する。

しばらくすると立方体は球となった。
やはり基本は円のようだ。

あまりに速く文字が動くもので、
球の内部は見えなくなってしまった。

突如としてその球が破裂する。
中から光が射す。
それは明らかに光以上に明るかった。
まさに「突き刺す」と言うに相応しい。

どうしたことか、
あれほど暗かった部屋の扉から対面には窓があった。
廊下にあった窓程ではないがそこからは太陽の光が差し込んでいた。
部屋の四隅の火はもう見当たらなかった。

そして部屋の中央には人がいた。
整った顔立ちに黒の短髪。
上下がジャージであることは部活帰りだから仕方がない。
が、どうにも締まらない。

それが彼、赤峰　弥生の召喚であった。

4話　なぜ？

老人の名はアルベスト
若々しく感じるが今年齢１１０を迎えた。
この世界の平均寿命が約７０～８０
つまり地球基準で考えてよいから凄まじいといえる。
だが、彼はこの国の元帥である。
この国は小さいので大元帥の位は無いから軍という集団で見るならばこの国で最高位である。
優秀な若者がいないわけではない。
彼が凄すぎたのだ。

それ故に自国下位の武人からは尊敬を込めて、
また他国の猛者からは畏敬と恐れを込めて、
知る者のみの間で囁かれることがある。
『竜杯』と。

この世界で生物界の頂点に在るのは「ドラゴン」。
「龍」「竜」とも言う。
物理的な力はもちろんのこと
そもそも出会った瞬間のその存在感が人を跪かせるに十分な威厳を持つ。
人が失いつつある本能でさえそれに従って頭を垂れさせるのだ。
「竜」の名を囁かれる「人」に対して１１０歳などで驚いてはならないだろう。

それほどの彼が行ったことは「召喚」

部下はみな驚いていた。
何よりこの小国が大国から国と承認された理由がアルベスト本人の力と言うほど彼は凄いのだが、
その彼が「召喚」をするのだ。
もちろん、彼が神にも等しき者を召喚するのではないかと恐れられたこともあるのだが、
それ以上に驚かれた理由は「何故元帥程の人が自信を強化するための召喚などを行うのか」という疑問であった。
だから「元帥の死が近い」とか「元帥以上の猛者が現れた」とか様々な噂が飛び交った。

だが結果をみるとその噂はすぐに静まった。
全ての人はこう思った
「彼は本気ではなかった」と。

それも仕方のないことで召喚されたのは青年。
それも何の気配も持たない若者であったからだ。

この世界では魔力と言って良いか分からないが、
まぁ、魔法を使うための素となるものだから魔力と言うしかないが
それが彼にはなかった。
そしてこの世界には階級があるのだが、
単純に言えば「それが魔力の量に比例する」と片付けられる。
それが無い。

アルベストが本気なら「竜」を呼び寄せても不思議ではなかったのだ。
故にその召喚にはもっと簡単な理由が付けられた。

この国は王政。

子は４人。
上に三姉妹
一番下に長男がいる。

三姉妹のうち長女、次女は嫁いでいる。
そして三女は１２歳
長男は９歳。
つまり、彼ら二人の安心できる遊び相手またお目付け役として青年は召喚されたのだと。
そう片付けられた。

では本当にアルベストはそう思っていたのだろうか。

そんなことはなかった。
彼自身驚いていたのだ。

彼は本気であった。
召喚後は部下の手前足取り一つとってもしっかりしていた。
が、実際は倒れそうなほどに全力で召喚を行った。

それはそうと、
なぜこれほどまでして彼はこの召喚にこだわったのか。

というのも、ここは小国。
大国の権威の前にはいつでも属国となり得る。
彼にとっては王の子４人は孫も同然。
また王も自分の子のように思っている。

その中で三女アリスは未婚。
年齢的には未婚であるのは当たり前だが、

もしアルベストが死ぬようなことがあれば必ず彼女はどこかの国に人質として嫁ぐまたは婚約しなければならないだろう。

人質とは聞こえが悪いが
そもそも小国が国であるためには大国に王族の誰かが関係者として存在しているのが常識である。
この国はアルベストの力故の国。
長男は後継であるから必然としてアリスが嫁がねばならない。

アルベストはこの「常識」を常々おかしいと思っていた。
故に今の彼は国を認めさせる方法を「人質」以外の何かでも可能になるように努力をしている。

だが、
これは政治。
力ではない。
いくらアルベストが強いとはいえ人の意識を変えることとは無関係であった。
いつ死ぬかもわからぬ年齢に、いつ達成できるかもわからぬ改革。

その保険が「召喚」であった。
もし何も成さず自分が死ぬようなことがあれば
自分と同じ程の力を持つ者の存在がこの国を国として存続させる。

アルベストは何も力で大国を屈服しているわけではない。
それは各国からの敬意である。
彼の功績を讃えこの国を何の対価も無しに国と認めているのだ。
これは５大国の総意である。

だから彼は呼び出した者に自分と同等の功績を納めさせることで今

の状況を気休めではあるが保っておきたかった。
だが結果はどうだろう。
魔力を一切持たず
見た目もただの人間でまだ幼い。
（まぁ１８歳なのだがアルベストにしてみれば）

故に情けなかった。
力はある。
が、その力が必要な時に役立たぬ。

そんな自分が情けなかった。

しかし、そうはいってもそれは自分の都合。
呼び出された者には関係のないこと。

相手にも様々な都合があったであろう。
それを呼び出しておいてこちらの都合に見合わないので「失敗」と
片付ける。

それは人として、また意識、常識の改革を為そうとする者の行為で
はない。

故に彼は召喚の一切を話した上で、
力の如何によらず、こちらの生活に不自由のないようにもてなすつ
もりだ、と語った。

それがせめてもの、
こちらの都合で動いた事への謝罪であった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5656k/

世界の外から

2010年10月14日16時09分発行